

令和7年度(2025)

FD・SD活動報告書

- 1 FD会議
- 2 FD座談会
- 3 SD会議
- 4 FDアンケート
- 5 授業リフレクション
- 6 教育相談Day
- 7 教育学部主担当教員アンケート
- 8 オープンクラス
- 9 修了生支援

鹿児島大学大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻
〔 教職大学院 〕

1 FD会議

FD 会議とは、教職大学院の FD・SD 活動のあり方を検討するとともに、活動に対する省察を行うための場である。毎月 1 回開催しており、教職大学院の専任教諭は全員参加している。内容としては、教育相談 Day を始めとする個々の学生の状況把握、FD アンケート結果の共有と改善策の検討、授業リフレクションの発表とその協議等であり、本教職大学院の日常的な FD 活動を支える機能を果たしている。

各回で扱った内容は次の通りである。

回	実施日	内容
1	4 月 21 日(月)	(1) 年各計画の確認 (2) 教育相談 Day, オフィスアワーの確認 (3) 授業リフレクションについて (4) 修了生支援サポート事業について (5) 新入生、2 年生の状況について
2	5 月 19 日(月)	(1) 第 1 ターム FD アンケートについて (2) R8 年度教員採用試験、出願状況について (3) 院生 (M1) の係活動分担について
3	6 月 16 日(月)	(1) 8 月 FD 座談会の開催について (2) 教育相談 Day について (3) 教員採用試験の状況について
4	7 月 14 日(月)	(1) T 1 FD アンケート結果について (2) FD 座談会質問・要望事項について ・ FD アンケートに対する委員会別回答 (3) 教員採用試験の状況について (4) 院生個別の状況について
5	9 月 22 日(月)	(1) T 2 FD アンケート結果について (2) 令和 7 年度 FD/SD 活動報告書作成方針について (3) 教員採用試験結果の確認 (4) 授業リフレクション (前期分) の依頼について
6	10 月 20 日(月)	(1) 教育相談 Day の計画について (2) 授業リフレクションの計画について (3) 院生の状況について
7	11 月 17 日(月)	(1) 修了生アンケートについて (2) 授業リフレクション開催について ① 説明科目「学校経営と組織マネジメント」(10 分) ② 小グループでの意見交換 (20 分)
8	12 月 22 日(月)	(1) 教育相談 day の報告について (2) 成果報告会後の交流会について (3) FD 会議の在り方について (4) 院生の状況について

9	1月13日(火)	(1) 第3タームFDアンケートについて (2) 授業リフレクションについて (3) 成果報告会後の交流会修了生発表について (4) 修了生の表彰・受賞等について
10	2月10日(火)	(1) 第4タームFDアンケート・ベストティーチャー賞について (2) 令和7年度FD・SD報告書作成方針について (3) 令和7年度SD会議について (4) 日本学生支援機構奨学金の返還免除候補者の推薦について
11	3月10日(火)	(1) 第4タームFDアンケート結果分析・検討 (2) 令和7年度年度FD・SD報告書の確認について

2 FD座談会

教職大学院の教職員と学生が、教職大学院における授業（講義、実習）及び学生生活についてFDアンケート等に基づく意見交換を行い、教職大学院における教育、研究の充実を目指す。

(1) 期日 8月22日

(2) 参加者 教職大学院専任教員12名，教職大学院生20名 事務職員1名

(3) 協議内容

ア これまでのFDアンケート等の結果説明

イ 院生の質問・要望に対する教員の説明

客員会（教務、実習、学生生活）、教職課題研究Ⅰ、教職課題研究Ⅱ等から

(4) グループ協議（45分）

① 「大学院での学びを充実させるための工夫を考えてみよう！」

② 「自由協議」（例） 課題探究，M1後半の実習

③ 学年・修了生ごとの自由協議

(5) グループ協議報告

3 SD会議

教職大学院として高度で実践的な教職専門性を育む適切な環境作りを目的に，教員と事務職員が連携し学生や教職員のニーズを踏まえた協議を行っている。

(1) 期日 3月18日

(2) 参加者 教職大学院専任教員7名，事務職員4名

(3) 協議内容

ア 教職大学院の入学者確保について

【入学者の数の推移，周知・広報の状況】

- ・ 現職教員についてはおよそ10名程度推移している。派遣には予算が伴うこともあり，県教委との連携を図っていきたい。

- ・ ストマスについては周知広報に努めたことでやや増加してきている。学生部の協力を得るなど，他学部への広報にも努めていきたい。

- ・ 教務委員会で他学部や県内私大等への周知を行っている。パンフレットの配布やポスター掲示など継続していきたい。
- ・ 入学者確保のためにも、学部から継続して5年で修了、あるいは現職でも1年で修了できるようなシステム作りも考えられる。
- ・ 学部3年生への周知及びオープンクラスへの参加増にも取り組みたい。
- ・ 短大からの編入生がいることから、短大へも広報の範囲を広げてはどうか。

イ 学習環境整備について

【研究室，空調，上層階への移動，ネットワーク整備等】

- ・ プリンターの消耗品についての要望があり，認証評価でも話題となっていたが，基本的に共用プリンターを活用してほしい。
- ・ トイレ修理等，営繕については順次対応している。
- ・ エレベータ設置については現時点では予算的に難しいが，引き続き要望していきたい。
- ・ 従前からの「生涯教育総合研究棟」の名称について，今後改名を検討してみてもどうか。

5 FD アンケート

教職大学院の学生の学習や生活の状況及び要望等を把握するため以下の要領でアンケートを実施し、指導改善に役立てている。

(1) 実施期間

ターム	期間
第1ターム	6/10～6/17
第2ターム	8/5～8/15
第3ターム	12/13～12/20
第4ターム	2/10～2/17

(2) 無記名のアンケート方式

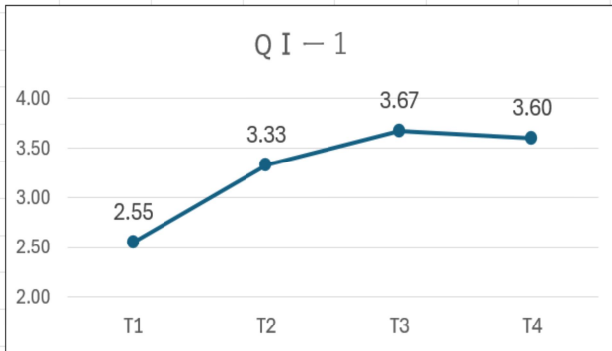
得点化してタームごと平均点を算出

4点：とてもよく当てはまる
 3点：どちらかという当てはまる
 2点：どちらかという当てはまらない
 1点：まったく当てはまらない

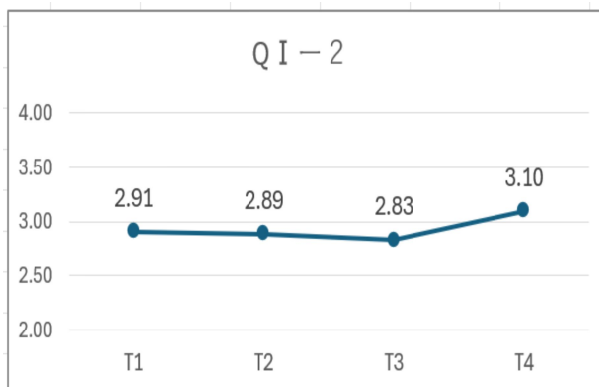
■ 1年生の結果 (回答者数 第1ターム11人 第2ターム9人 第3ターム12人 第4ターム12人)

【I 授業と実習の全体について】

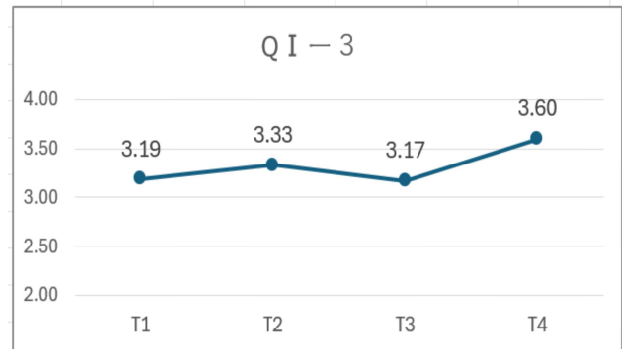
1) 授業と実習はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか。



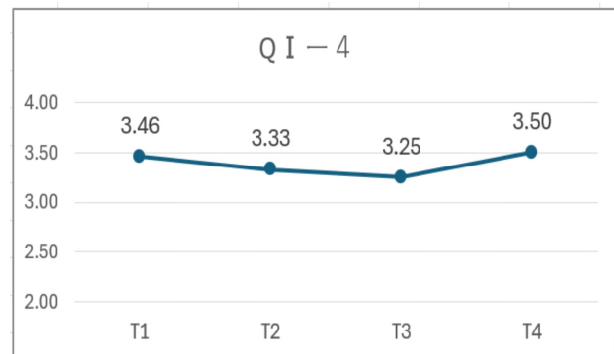
2) 授業と実習の時間上のバランスは適切でしたか。



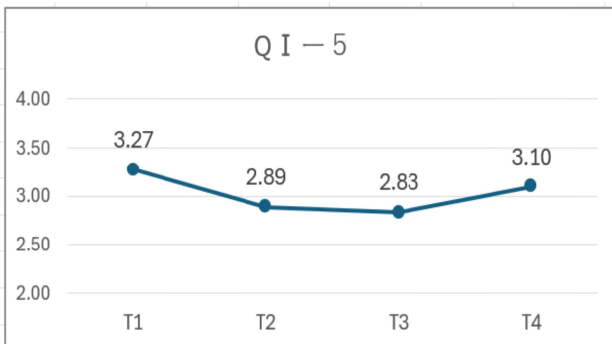
3) 教育課程は、新しい学校づくりの有力な一員となりうる新任教員ならびにスクールリーダー（中核的中堅教員）の養成を果たすのにふさわしい内容でしたか。



4) 教育内容は、教育現場における課題を積極的に取り上げ、その解決に向けた内容になっていましたか。



5) 履修指導は適切でしたか。

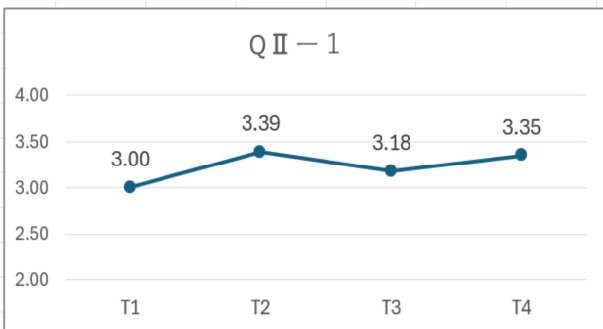


6) 施設と設備は利用しやすかったですか。
(自由記述のため割愛)

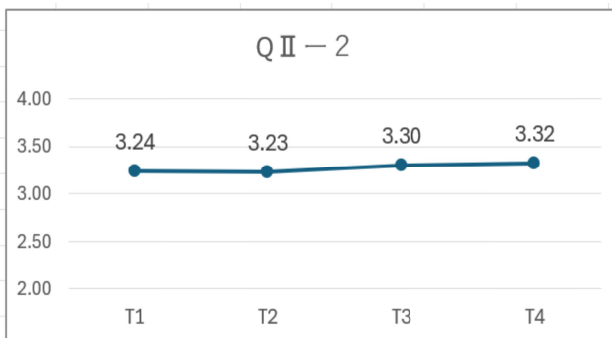
7) 現職と学部新卒と一緒に学べるように
授業が組まれていますか、いかがですか。
(自由記述のため割愛)

【Ⅱ 必修科目について】

1) 授業内容はあなたのニーズにそった
ものでしたか。



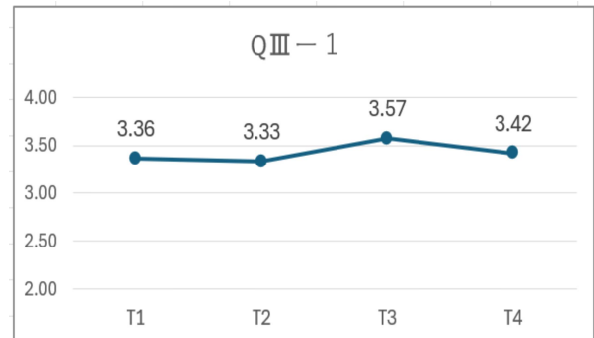
2) 教員の指導体制は適切でしたか。



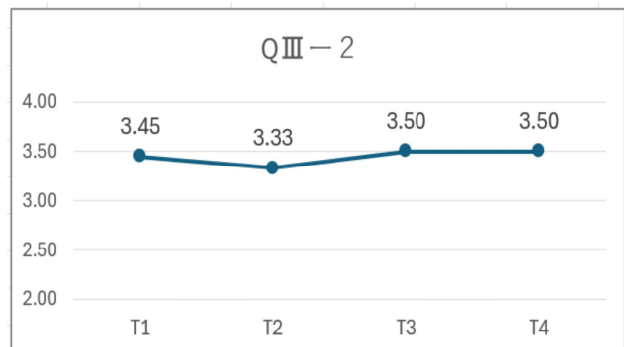
3) 満足している点と改善してほしい点がありますか。
(自由記述のため割愛)

【Ⅲ 選択科目について】

1) 授業内容はあなたのニーズにそった
ものでしたか。



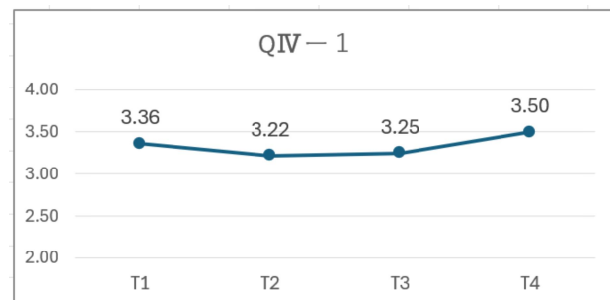
2) 教員の指導体制は適切でしたか。

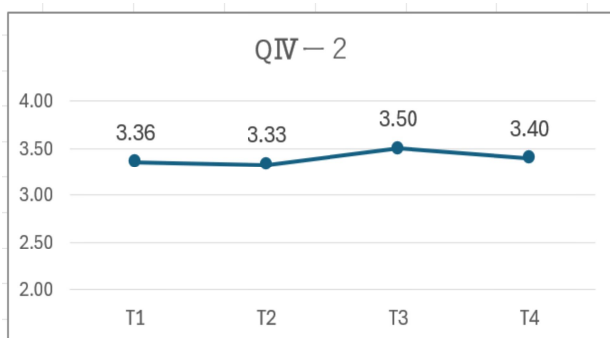


3) 満足している点と改善してほしい点がありますか。
(自由記述のため割愛)

【Ⅳ「教職課題研究Ⅰ」について】

1) 授業内容はあなたのニーズにそった
ものでしたか。



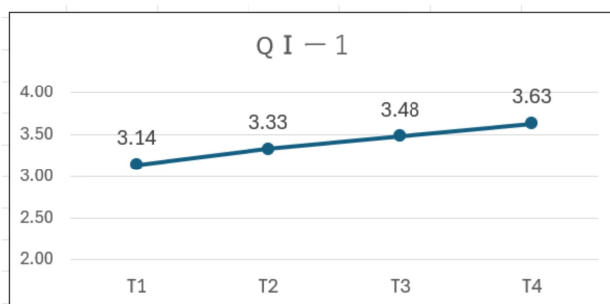


2) 教員の指導体制は適切でしたか。

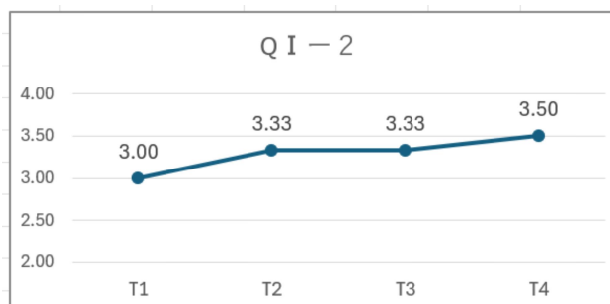
■ 2年生の結果 (回答者数 第1ターム14人 第2ターム9人 第3ターム9人 第4ターム8人)

【I 授業と実習の全体について】

1) 授業と実習はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか。



2) 授業と実習の時間上のバランスは適切でしたか。

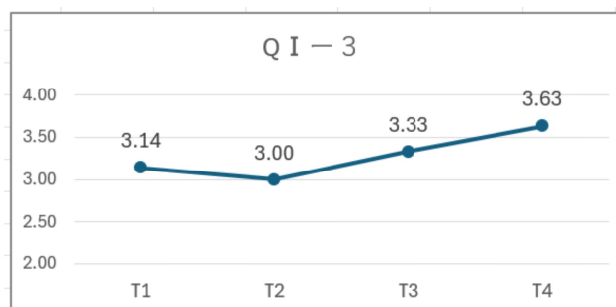


3) 満足している点と改善してほしい点がありますか。(自由記述のため割愛)

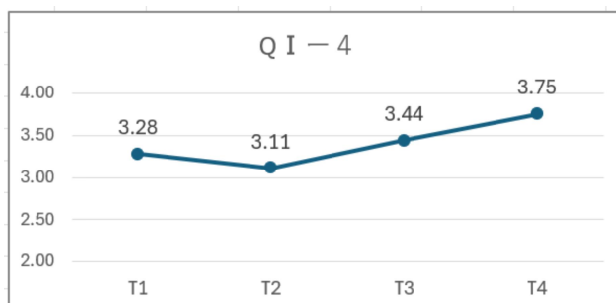
【V 授業以外及び実習以外での教員の対応について】

(自由記述のため割愛)

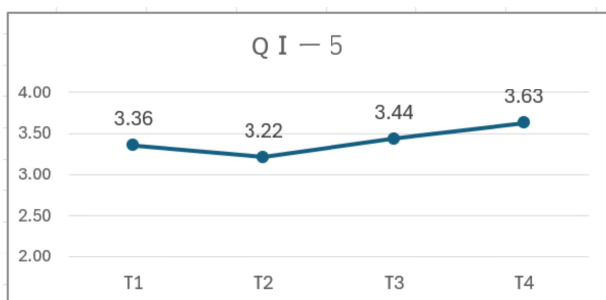
3) 教育課程は、新しい学校づくりの有力な一員となりうる新人教員ならびにスクールリーダー(中核的中堅教員)の養成を果たすのにふさわしい内容でしたか。



4) 教育内容は、教育現場における課題を積極的に取り上げ、その解決に向けた内容になっていましたか



5) 履修指導は適切でしたか。

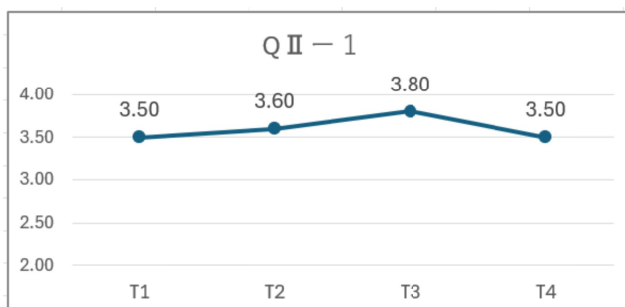


6) 施設と設備は利用しやすかったですか。
(自由記述のため割愛)

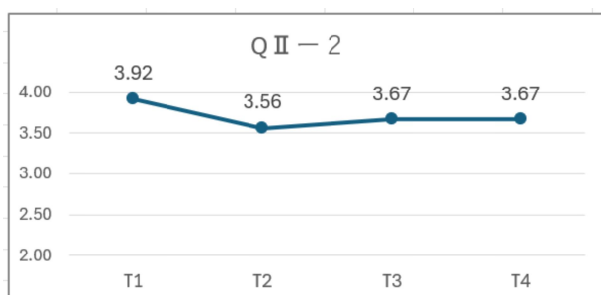
7) 現職と学部新卒と一緒に学べるように
授業が組まれていますか、いかがですか。
(自由記述のため割愛)

【Ⅱ 授業について】※「教職課題研究Ⅱ」以外

1) 授業内容はあなたのニーズにそった
ものでしたか。

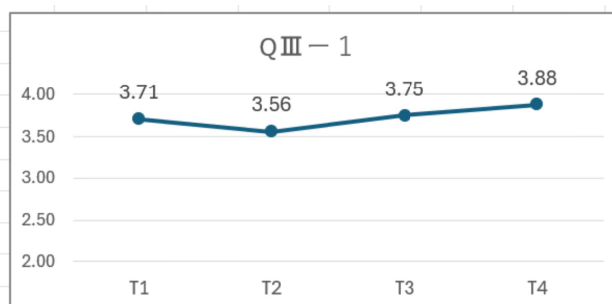


2) 教員の指導体制は適切でしたか

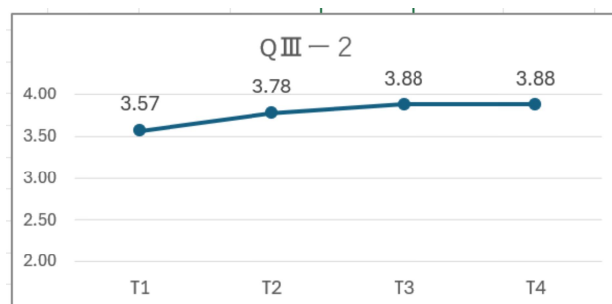


Ⅲ 「教職課題研究Ⅱ」について】

1) 授業内容はあなたのニーズにそった
ものでしたか。



2) 教員の指導体制は適切でしたか。



3) この授業では訪問授業や大学での授業
を行っていますが、満足している点と改
善してほしい点がありますか。
(自由記述のため割愛)

4) その他で満足している点と改善して
ほしい点がありますか。
(自由記述のため割愛)

5 授業リフレクション

授業改善について、それぞれの教員が担当の授業を振り返り、その成果や課題を記述する「授業リフレクション」を作成し、次年度以降の指導に生かしている。

講義名	学校を基盤とするカリキュラム開発
担当者名	廣瀬・羽生（2025～）
講義の目標	現職：事例を整理し、その多様性や特徴を理解・分析できる
	ストマス：教育課程の具体的な要点や手続きを理解し、その開発力量を高める
	共通：カリキュラム開発等の諸理論や、その意義、要点を理解できる
年	2025（R7）
講義準備や打ち合わせのメモ	・みなし教員と連絡をとり、各自の紹介事例について、準備をお願いする
講義の工夫点	・今期も、共通学習事項について、ジグソー法により個々の関心等を踏まえた学習活動になるように留意した ・個人で調べたり、レポートを作成したりする時間を講義の後半部分に設け、個別に、院生の相談に応じるように留意した
プチ・リフレクション	・高度化実践実習Ⅰでの活動と本講座の内容をつなげ、理論と実践の往還を試みようとする院生が見られた。レポートの書き方についても少し時間を設けて解説したが、事例を理論的な枠組みから分析する意義について、さらに補足が必要だったと反省している。
次年度の改善点	・上記の改善を図ると共に、昨年度からの継続課題である理論を教えることがメインになる時間と、受講生が探究的に活動をする時間とのバランスをとりたい。院生の様子や反応を確認しながら、柔軟に時間配分を工夫するよう心掛けたい。
教育課程 （履修案内等へ）	・特記事項なし

講義名	特色ある教育課程とそのデザイン
担当者名	廣瀬真琴、高瀬和也、羽生一久
講義の目標	現職：カリキュラム（複数学年・教科横断的）を、事例や理論を活用してデザイン・修正できる
	ストマス：カリキュラム（単元レベル）を事例や理論を活用してデザイン・修正できる
	共通：特色あるカリキュラムの意義、要点、そのデザイン方法を理解できる
年	2025（R7）
講義準備や打ち合わせのメモ	・202411：講義計画や内容の刷新についてTeamsで打ち合わせ
講義の工夫点	昨年度同様、形態：年度末のため、各自の学びの総括を図ることをねらい、個別学習を基本とした。また、1年間の学びを補充することを意図し、トピック（特別支援、ICT、鹿児島の教育の特色など）学習も行った。ICTに関しては、近年の教育動向を踏まえ、リスク教育をキーワードとした講義と演習を実施している。
プチ・リフレクション	・第4タームに開講されているため、1年間の学びを総括したり、振り返ったりする上で重要となるトピック（ICT、特別支援、県の教育的特色）については、大学院のカリキュラムとの整合性から、今後も継続したい。次年度の探究に向けて、単元開発や教材研究などに取り組む院生の姿を見て、励まされる思いがした。
次年度の改善点	・個別学習において、関心に基づいてグループ学習やペア学習をすることを促していきたい
教育課程 （履修案内等へ の変更事項）	・特記事項無し

講義名	特別支援教育とカリキュラム・マネジメント
担当者名	佐藤誠, 芝原一郎, 橋口知, 福島幸太郎
講義の目標	現職 ①授業研究の場においてファシリテーターを務めることができる。 ②所属校のカリキュラム・マネジメントの現状と問題点を挙げる
	ストマス ①授業研究の方法論について説明ができる
	共通 ①特別支援教育に関連した学校教育法制の概要を説明できる。 ②特別支援学校学習指導要領に基づいた学習指導案や個別の指導計画の作成ができる。 ③カリキュラム・マネジメントポイントについて説明ができる。
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	2025年4月：授業計画について担当者間で共通理解
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ・担当者3人によるオムニバス型講義を行ったこと。 ・「重点領域実践実習Ⅱ」と関連を図り、受講者一人の授業づくりについて、協議しながら講義を進めたこと。 ・特総研の研究員にゲストティーチャーとしての協力を得たこと。
プチ・リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> ・「(特別支援教育)重点領域実践実習Ⅱ」とのさらなる関連を図る。 ・現職教員学生については、在籍校におけるカリキュラム・マネジメントの推進に学びの成果を発揮してもらいたい。特に、個別の指導計画の実施状況の評価と改善を、教育課程の評価と改善につなげていくための具体的な方法についても授業の中でさらに充実させていきたい。
次年度の改善点	・受講生が少ない場合の内容・方法を検討する必要がある。
変更事項	・令和8年度の授業は、後期、金曜日、3限に変更となる。

講義名	教材研究、指導方法、評価に関する実践的課題とその改善
担当者名	溝口 和宏・假屋園昭彦・宮崎幸樹・原田義則・みなし専任教員
講義の目標	現職：・各校における授業改善を推進するための児童・生徒の発達に即した教材研究、指導方法、評価の在り方について考察し、モデルとなる単元デザインや評価法を構想することができる。 ストマス：・児童・生徒の発達に即した教材研究、指導方法、評価の在り方について理解し、単元デザインや評価方法を構想することができる。 共通：・各教科・領域の中から教材を選択し、ユニバーサルデザイン、アクティブ・ラーニング、小中一貫教育、評価等の視点を踏まえた単元を開発し、単元構成や評価方法の意図やねらいについて論理的根拠をもって説明することができる。

年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	・240407:本年度の進め方(授業全体のデザイン)について主担当者から担当者教員にメール・Teamsで連絡・協議した。 以降は、授業のスケジュールに沿って、毎回の授業の構成・展開をメール・Teamsで連絡した。 ・2307031:最終の成績について確認した。
講義の工夫点	・全体的な授業計画は昨年とほぼ同様の構成であったが、新学習指導要領の改訂に向けた議論が進んでいることから、文献調査の回を減らして、関係資料の読み取りとディスカッションの時間を1回増やすこととした ・小中一貫教育について今年度は南さつま市立金峰学園を訪問し、学校環境から教育課程編成、教室の設営や実際の授業まで様々な観点から視察を行うとともに、学校側からの説明や質疑の時間も設けるようにした。 ・最終課題の発表会の日時を昨年度と同様に、学期内に全ての授業回を終えられるようにした。
プチ・リフレクション	・新学習指導要領の論点整理などの議論については、学生の関心も高く、最終課題の基礎資料にする学生も多く見られた。 ・小中一貫教育について、今年度も実際に学校訪問をすることができ、学校環境や施設、設営なども含め様々な点で、小中一貫教育に関する学びを広げることができた。 ・今年度も最終課題の作成までの期間が例年より短かく、発表内容において十分に練られていない部分も見られた。
次年度の改善点	・受講者数や属性により進め方が変動する可能性があるが、基本的方向性は踏襲したい。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	次年度は、授業名をもう少しシンプルな名称に変更したい。

講義名	特別支援教育の授業デザイン
担当者名	佐藤誠、高瀬和也、芝原一郎、橋口 知、福島幸太郎
講義の目標	現職 障害のある幼児児童生徒を対象に、個別から小集団での指導形態において授業を計画、評価、改善できる。
	ストマス 障害のある幼児児童生徒を対象に、個別から小集団での指導形態において望ましい授業づくりのあり方を説明できる。
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	2024年4月：授業計画について担当者間で共通理解
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多様な学びの場での授業デザインを広く学ぶために、①特別支援学校の肢体不自由対象、②特別支援学校知的障害対象、③小学校特別支援学級を授業を取り扱った。 ・ ①理論、②動画を用いた授業研究、③学校訪問による教員との情報交換を学習サイクルにすることで、大学での学びだけではなく、現場の教員の実践にも触れることができるようにした。 ・ 「特別支援教育高度化実践実習Ⅰ」と関連を図り、検証授業、授業研究を行ったこと。 ・ 学校側の生徒管理面からの学生対応が難しさから、授業参観が難しかったことから、大学で動画を用いた授業研究を行い、後日、学校訪問の場で、授業分析についての報告を行ったこと。
ブチ・リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校との時間割調整で、授業参観は難しかった。引き続き、可能な限り、実際の授業参観を行っていくことで、特定の場面ではなく、1時間及びクラス全体の様子をつかめるように計画をしていきたい。 ・ 後期一前期に移行したことで、重点Ⅱの実習に円滑につなぐことができたと考える。 ・ 学校側の生徒管理面からの学生対応が難しさから、授業参観を動画を用いて行ったことは、学生の学びに有効であった。 ・ 学校教員との情報交換は、動画で捉えきれなかった子どもの姿や学校の実情を知る上で効果があった。
次年度の改善点	・ 重点Ⅱ（特別支援学校実習）での子供の実態把握を中心とした授業デザインに生かせるようにしていきたい。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	・ R8も R 7 同様、前期開講

講義名	教育相談の方法と実践
担当者名	関山徹・有倉巳幸・鮫島俊之・初村多津子
講義の目標	現職：支援チームを組織して具体的課題の解決にあたりとともに、学校全体としての教育相談を計画・運営できる
	ストマス：教育相談で求められる共感的な関わり方を理解するとともに、それを支援チームの一員として具体的課題の中
	共通：一人ひとりの児童生徒の個性や発達の違いを考慮した教育相談活動を組織的かつ計画的に行うことができる
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 20250219：次年度の構成・日程について担当者間で共通理解 ・ 20250414：内容や授業方式について担当者間で共通理解 ・ 20250620：みなし専任実務家教員との内容・段取りの確認
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新たなワークシートを使って、アセスメントを多角的に検討できるようにした ・ 事例検討においては客観的な精密さだけでなく当事者の心情にも共感して支援策を検討できるように時間配分や発問を工夫した。
プチ・リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループ討議の時間が全体的に窮屈だったので、内容の精選を図って時間をつくりだしたい ・ 共感的な聴き方については、内省の時間を設けてその内容について語る機会を設けてみてもよいかもしれない
次年度の改善点	・ 時間配分に留意してより効果的な授業展開を図りたい
教育課程 (履修案内等への変更事項)	

講義名	学校における生徒指導の実践と課題
担当者名	假屋園昭彦・関山徹・島義弘・鮫島俊之・初村多津子
講義の目標	現職：生徒指導の諸課題について多面的に理解し省察するとともに、コーディネーターとして組織的に実践できる。
	ストマス：生徒指導の具体的課題について理解し省察するとともに、組織の一員として協働的に実践できる。
	共通：生徒指導の諸課題について理論的枠組みと関連づけて理解し省察するとともに、組織的に実践できる。
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	本講義は集中講義である。そのため、できるだけ多くの院生が受講できるように開講時期について協議した。その結果、本年度から通常講義と実習と重複せず、しかも受講しやすい時期として8月から9月にかけて開講することとした。
講義の工夫点	理論面と実践面のバランスを考えた。単なる事例検討にならないように工夫した。実践を支えるのは理論であること、および経験則に依存した生徒指導にならないことが大切であることを受講者には伝えた。
プチ・リフレクション	学部新卒生はどうしても生徒指導経験が浅い。したがって学部新卒生に講義内容についての興味関心をもらうための工夫が必要である。できるだけ実践例を取り入れながら、院生の興味関心を高めながら進めたい。
次年度の改善点	できるだけ多くの院生に受講してもらうことができる時期の選定を行う。生徒指導提要の内容も積極的に取り入れながら、学校現場に即した内容の講義を策定する。履修申請の時期について前期、後期の2回実施するのか、後期の1回のみを実施するのかを明確にした方がよい。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	なし

講義名	特別支援教育と学校経営
担当者名	芝原一郎・佐藤誠・橋口知
講義の目標	現職 学校における学校組織マネジメント、学校評価等の基本的な理論を説明することができるとともに、現任校の学校経営（改善）案を作成することができる。
	ストマス 特別支援教育に求められる学校組織マネジメント、学校評価等の基本的な理論について学び、現職教員と共に学校経営（改善）案の作成意図と作成過程について説明することができる。
	共通 本授業は、現任校や実習校の現状分析や事例検討を通して、特別支援教育で求められる学校組織マネジメント、学校評価等の基本的な理論を理解し、適切な学校経営（改善）プランについて考察・検討する専門的能力を培う。
年	2025（R7）
講義準備や打ち合わせのメモ	・事前に担当者間で打合せを行った。
講義の工夫点	・今年度から担当者が代わった。受講生は現職教員学生とストマスが混在していたため、各回のテーマに基づく学校現場の現状や改善策を中心にディスカッション形式で授業を展開した。
プチ・リフレクション	・受講生は特別支援学校在籍あるいは採用希望であることから、特別支援学校の特色や課題、工夫などについて理解を深めることができたものとする。また、本授業の最終目標については、仮想特別支援学校のグランドデザイン・校訓等を発表することができた。
次年度の改善点	・学校経営に係る事例研究の在り方について、特に内容や方法等を検討していく必要がある。
履修案内変更	・特になし

講義名	鹿児島における学校教育と教員のあり方
担当者名	小屋敷浩昭、小林俊一郎、芝原一郎
講義の目標	現職 本県の教育上の諸課題を踏まえながら、教育力向上のための対応力を養成し、ファシリテーションできる。
	ストマス 本県の教育上の諸課題を分析し、対応策を考察できる。
	共通 ・本県の特色ある教育施策や教育課題等の内容を理解する。 ・本県の教育課題の対応策等について、ユニバーサルデザイン、ICT、アクティブ・ラーニング、少人数教育、小中一貫教育等の視点を踏まえながら考察し、提言することができる。
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	・2025 4月：講義の形態、内容等について、担当者間で共通理解 ・2025 7月：県教委へ依頼公文の発出 ・2025 9、10月：県教委、訪問学校との日程調整 など
講義の工夫点	・形態：原則、対面で実施 ・教育行政機関や専門高校を訪問して、教育行政の在り方や専門高校の実態把握に努めた。 ・討議等は討議内容ごとに、ストマスと現職を同じグループにしたり、校種（希望校種）ごとのグループに分けたりして実施した。
プチ・リフレクション	・本県教育の特色、教育課題、教育行政等に関する内容については、現職も理解していない内容もあり、ストマスを含め、興味・関心は高い。 ・今後、鹿児島県の特色あるデータや資料等を更新して、常に最新の情報を提供していく必要がある。 ・教育施策提言の班別発表の役割分担を工夫する必要がある。
次年度の改善点	・訪問等については、県教委や学校と連絡を密にし、時期を含めより充実した内容となるよう工夫したい。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	特になし。

講義名	インクルーシブ教育における教師の専門性
担当者名	片岡美華・芝原一郎
講義の目標	現職教員学生 本授業で得た知識を活用して教師の専門性向上に貢献できる態度を養う（具体的プランを出せる）。
	ストマス インクルーシブ教育に関して最新の情報や知見に対して常に関心を持ち学び続ける態度を養う（自己目標を立てられる）。
	共通 1. インクルーシブ教育時代において教師に求められる資質や専門性について理解し表現できる。 2. 自己分析を通して現在の力量と課題を把握し、具体的解決方法を言える。

年	2025（R7）
講義準備や打ち合わせのメモ	・2024年4月：授業計画について担当者間で共通理解
講義の工夫点	・インクルーシブ教育に関する歴史的な観点、国内外の現状についての諸資料を基に、各々が自己分析を通して課題を見出し、問題解決の方策を検討できるような授業構成とした。特に、指導者を含め率直な意見を交わせる討議の場を重視した。 ・ストマスと現職教員学生が混在するグループを編成し、専門性のとらえ方とその向上のための方策についてまとめ、発表・共有する場を設定した。
プチ・リフレクション	・現職2人、ストマス2人、全員が特別支援プログラムという構成であった。特別支援教育の経験や免許教科に関わらず、全員が意欲的に参加し、充実した発表ができた。 ・国内だけでなく諸外国の実情を紹介する文献・論文等を提示したことで、我が国のインクルーシブ教育における現状や課題を議論することへの意識が高まったと思われる。
次年度の改善点	・現職とストマスの知識や経験が大きく異なるため、資料の提供や協議の内容、ストマスが遠慮なく意見を述べられる雰囲気づくり等を更に工夫する必要がある。県内の先進的な取組を行っている学校と自校（現職）や実習校（ストマス）と比較しながら、同僚・メンター・集団・組織としての実地的・具体的な取組を検討する場を、更に充実させたい。
教育課程 （履修案内等への変更事項）	・特になし

講義名	特別の教科道德の授業デザイン論
担当者名	假屋園昭彦
講義の目標	現職：これまでにはない新しい授業デザインを考え、開発し、職場で実際に実践してもらう水準を目指す。また道德的価値理解の理路およびそのための発問開発を目指す。
	ストマス：道德の基本的な授業展開を習得する。さらに道德的価値理解を目指した発問作成の理路を習得する。
	共通：授業デザイン構築に必要な三つのキーワード（価値のものさし、抽象化、自問自答）の理論と実践面を習得する。
年	2025（R7）
講義準備や打ち合わせのメモ	単なる授業スキルの紹介にならないため、大学院レベルの水準を維持するため以下の準備を行った。まず授業で扱う道德的価値（親切、誠実、勇気などの概念）を学術的に捉えるため、心理学、哲学、倫理学の知見を講義の中に取り入れた。さらにこれらの知見から必然的に構成される授業デザインと発問を策定した。これらの授業デザインと発問を講義の中で紹介した。担当者自身が自らの研究の中で開発した授業デザインや発問は、自らの研究成果として講義のなかでも紹介した。
講義の工夫点	一方的な講義にならないように、実際の道德の授業形式で進めた。院生に児童生徒役になってもらい、模擬授業形式で実施した。模擬授業の各学習活動に際して解説を加え、院生の意見を取り入れながら、授業デザインの開発活動を行った。院生の探究課題の策定にも役立つように、開講時期を第1タームと第2タームに変更した。これまでは第3タームと第4タームであった。
プチ・リフレクション	道德については院生の間でも力量に差が見られた。そのため基本的な箇所は、その都度、学習指導要領解説を用いて確認しながら進めた。できるだけ実際の授業イメージを描くことができるように務めた。
次年度の改善点	学習指導要領解説レベルの基本的内容と新たな授業デザイン開発レベルの実践的内容とのバランスを考えながら進めたい。発問づくりの過程を段階を踏んで考察し、発問づくりの力量を身に付けてもらう工夫をしたい。
履修案内変更	なし

講義名	特別活動の理論と実践
担当者名	羽生一久・廣瀬真琴
講義の目標	現職 ・特別活動の事例や特別活動の意義や特色を、多角的に分析できる。
	ストマス ・特別活動の意義や特色を理解できる。 ・集団活動をデザインする力量を形成する。
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	・teamsのチャット機能を使って随時、打合せ
講義の工夫点	・学習指導要領解説特別活動編を読み込み、「特別活動の基本的な性格と教育活動全体における意義」と「各活動・学校行事」について深く理解した上で、課題となっていることを解決するために、各自が特別活動の学習に関するアイデアを考え、提案する。
プチ・リフレクション	参加者は積極的に学習指導要領解説特別活動編を読み込み込んだり、その他の情報について積極的に調べたりしていた。その時間を十分に確保した結果、多くの院生が想定以上のアイデアを提案した。
次年度の改善点	個別の活動時間が長くなる傾向があるため、学生同士の対話を通して視野を広げる機会や、自らの学びを振り返るリフレクションの場面を意図的に設定していきたい。個別活動は深い思考を促す利点がある一方で、他者との対話を通じて多様な視点に触れることで、学びがより深まると考えられる。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	

講義名	学校の安全・安心と危機管理
担当者名	関山徹・小林俊一郎・黒光貴峰
講義の目標	現職：学校安全・危機管理と心の健康管理に関する知識と対処法について包括的に理解し、組織の中核的な立場から準
	ストマス：学校安全・危機管理と心の健康管理に関する知識と対処法の基本事項を理解し、それを組織の一員として協働
	共通：学校安全・危機管理と心の健康管理に関する知識と対処法を理解し、それを組織的に実践できる。
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> ・20250831：今年度の構成・日程について担当者間で共通理解 ・20251010：内容や授業方式について担当者間で共通理解
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ・受講者の構成が例年に比して学部卒院生や若年現職教員学生が多いので、それに配慮した内容にするようにした ・今回も受講者の毎回のリフレクション・シートに対して、教員がすべてフィードバック（回答）を行った
プチ・リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> ・受講者が少人数であったためグループ討議の設定を少なめにして、指名して意見を求めるなどの工夫をした ・気象庁職員をゲストに迎えての防災教育ワークショップは毎年実施しているが、特に今回は学生の理解が深まった印象がある
次年度の改善点	・グループ討議の仕方の工夫や内容の精選を行っていく
教育課程 (履修案内等への変更事項)	

講義名	生活科・総合的学習のカリキュラム開発
担当者名	浅野陽樹、下木戸隆司、島義弘、宮崎幸樹、廣瀬真琴
講義の目標	現職
	ストマス
	共通 1. 理論や実践知の獲得 2. 理論や実践知を基にした授業や単元等のデザイン 3. デザインの共有と振り返り
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	・202409：講義計画について担当者間で共通理解
講義の工夫点	昨年度同様、現職教員学生とストレートマスターが協力し、仮想の学校における総合的な学習のカリキュラム開発を行った。その前段階として、探究的な学習にかかる非認知能力と認知能力に関する学習を心理学者が、授業実践とそれらの関連性の検討を促す学習を教科専門及び実務家教員が提供した。
プチ・リフレクション	院生の様子：次年度に開講予定の義務教育学校を想定して、生活科・総合的な学習のカリキュラム開発を実施した。市教委の担当者らに院生の提案を評価してもらう機会を設けたところ、実践に資する提案とのコメントをいただいた。院生が嬉しそうであった。
次年度の改善点	・院生自身が、本講義において探究するよう、さらに工夫を凝らしていきたい
教育課程 (履修案内等への変更事項)	・なし

講義名	グループダイナミックスからみた学級経営
担当者名	有倉巳幸、東佑樹（附属中）、前下勝信（附属小）
講義の目標	現職 これまでの学級経営をグループダイナミックスの知見から省察した上で、改善プランを提案できる
	ストマス ・学級経営に関して、グループダイナミックスの知見から省察できる
	共通
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	・授業スケジュールについて、メールで照会
講義の工夫点	・形態：第1回はオリエンテーションと概説、第2回～第14回は理論的知見の概説と、グループディスカッション、第11回～15回にかけて、附属小・中の先生方の実践紹介を入れた。
プチ・リフレクション	<p>今年度の授業は、6名の受講があった。直近2年間と異なり、今年度は現職教員学生が3名受講してくれた。学級経営において、探究課題はもちろん、自身の学級経営や生徒指導の経験や知識と結びつけ、単に児童生徒個人や学級集団に閉じない視点を獲得できたようだ。グループダイナミックスの知見は、学校現場でみられる様々な行動や集団現象がなぜ起こるのか、その原因を明らかにする上で有効である。本授業では、主担当者が現在取り組んでいるいじめの傍観者研究の知見も紹介し、学級集団や周囲の生徒に対する個人の認知のあり方が周囲の生徒の行動規範への同調を促し、結果的に傍観行動が強化されるという現象に関心をもって来ていた。</p> <p>授業の後半で行うグループディスカッションは、受講生が少ないため、以前よりは、多角的な視点での議論が減ってきている。</p> <p>今年度も、附属中の東先生からは、生徒のリーダーシップ育成について、附属小の前下先生からは、学級づくりの実践についてそれぞれ話をしてもらったが、受講生によっては、それまでに行った理論的説明とも結びつけて省察していた。来年度以降、附属の実践と様々な角度からリンクできるように、授業のコンテンツを工夫していきたい。課題としては、お二人の先生のmanaba登録ができていなかったことから、リフレクションを随時見ってもらうことができなかった。</p>
次年度の改善点	・
教育課程	・来年度で一応、この授業を閉じる予定

講義名	集中講義「学校経営と組織マネジメント」 NITS・南九州プラットフォーム合同セミナー活用
担当者名	小林俊一郎・小屋敷浩昭・芝原一郎
講義の目標	現職：組織マネジメントの考え方や進め方について基本的な理解を深める。特色ある学校づくりや学校組織、教員集団をマネジメントできる力を身につける。
	ストマス：組織マネジメントや学校経営に関する基本的な理解を深め、学校運営に積極的に参画しようとする意欲を高める。
	共通：本授業は、組織マネジメントの本質を理解するとともに、特色ある学校づくりに積極的に取り組むことのできる実践的・専門的力を身につけることを目指す。
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2025 4月：本年度の進め方について熊本大学担当と協議 ・ 2025 7月～8月：NITS・南九州プラットフォームコラボ研修講師選定 ・ 2025 11月25日：院生対象の第1回講義 ・ 2025 12月13～15日：コラボ研修実施（第2回～第13回） ・ 2025 1月6日：コラボ研修を通しての議論 ・ 2025 1月30日：校長経験者による講義・まとめ
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ・ コラボ研修前後においては、校長経験者の実務家教員が実際の学校経営について具体例を挙げながら説明した。 ・ ミドルリーダーマネジメント能力育成プログラムとして学校ビジョン、カリキュラム・マネジメント、ICT活用、ワークエンゲージメント、コーチングなどミドルリーダーが直面する教育課題を中心に講義を創り上げた。 ・ 鹿児島・熊本両県の教育関係者に周知し、意見交換が円滑に進められるようにした。
プチ・リフレクション	本年度は、鹿児島大学、熊本大学の教職大学院生の意見交流が促されるようなシンポジウムを設定し、好評を得た。受講者が相互に自分の考えを述べる機会を設けることは、理解を深め研修に参加している意義を感じさせることが示唆された。
次年度の改善点	NITS・コラボ研修については、次年度から継続されない方針が示されたことから、本集中講義については抜本的な変更が必要である。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	学校経営についての概論的な講義、新設される義務教育学校と連携した授業及び研修を構築し、教職大学院生の主体的な学習を進めると共に当該学校の職員・児童生徒及び地域住民を含めた発表会等を教育課程に組み込んでいく。

講義名	授業研究の理論と実践
担当者名	廣瀬・溝口・羽生（2025～）
講義の目標	現職：授業の観察・分析を緻密に行うとともに、授業検討会における議論を的確に整理し、討議を円滑に進めるファシリテーターとしての役割を果たすことができる
	ストマス：授業の観察・分析を的確に行うとともに、授業検討会においても、その趣旨や進行方法を理解して、討議の中心課題をふまえた授業改善のための議論を行うことができる
	共通：なし
年	2025（R7）
講義準備や打ち合わせのメモ	<次年度に向けて> ・担当変更に伴い、講義の進め方を一部変更した。
講義の工夫点	・第1タームの講義であるため、院生の協働を促したり、文献の読み方や資料収集、整理の仕方などの基礎的な研究の進め方についても指導している ・多様な文献を教室後方に並べ、院生各自のテーマに基づいて調べ学習が進められるよう環境を整えた
プチ・リフレクション	・本講義は9回目（年目）になるが、児童生徒に注目した授業研究の進め方について、入学前に経験したり、実践したりしている受講生が増えてきたように思う。その理論的な背景について学ぶ機会を本講義で保障することが大事だと感じた。
次年度の改善点	・上記の経験を相対化させ、児童生徒を見る活動が形骸化していないか俯瞰させるよう働きかけたい
教育課程 （履修案内等への変更事項）	・特記事項なし

講義名	学校教育におけるデータ分析とその活用
担当者名	假屋園昭彦
講義の目標	現職：教育データの正しい解釈の仕方および分析方法を習得する。そのうえで教育実践に対するデータの活用のあり方を習得する。
	ストマス：統計学に基づいたデータ分析の理論と分析方法を習得する。学校場面で教育データの活用方法を習得する。
	共通：教育データを適切に分析し、エビデンスとして用いることができる。研究目的に応じた計画を立案し、データ収集および分析方法を習得する。
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	研究の基本的な考え方、倫理面での注意を最初に扱った。そのうえで研究計画の立案（文献の読み方・仮説の立て方・データ分析の方法・結果の解釈の方法）についての講義計画を作成した。データ分析の演習用の練習用資料を作成した。また質問紙調査の集計の仕方を扱った。
講義の工夫点	自力で基本的なデータ分析ができることを具体的な目標とした。そのため統計学の基礎理論と理論を使った実際のデータ分析の実習の二本立てを一つのユニットとして、単元を構成した。講義に際しては、当日の講義の振り返りおよび前回までの振り返り（復習）を必ず取り入れ、知識と技術が受講者の中に確実に蓄積されることを目指した。
ブチ・リフレクション	データ分析はどうしても数字を扱う。そのため数字に対して苦手意識をもっている受講者が一定数見られる。またいわゆる文系教科や現職はデータ分析の重要性を認識していないケースもみられた。これらのケースへ対応するため、定期的に確認試験を実施した。確認試験は資料やパソコンなど閲覧、確認しながら取り組んでよいという形にした。この確認試験によって受講者の習得の程度を把握しながら講義を進めた。
次年度の改善点	「ブチ・リフレクション」に記述した点について、講義の中で定期的に実施する確認試験の内容と頻度を再検討する。統計学の理解の前提となる数学（高校2年生レベル）の知識に院生間でバラツキがある。授業のなかでは統計学に必要な高校レベルの数学の講義を併せて行いながら理解を図
教育課程 (変更事項)	なし

講義名	発達障害の医療と支援
担当者名	橋口 知
講義の目標	現職：これまでの教育と医療等との連携協働の実践を振り返り、より適切な支援を挙げることができる。
	ストマス：発達障害医療に関する知識を整理し、具体的な教育的支援を挙げることができる。
	共通： 1 発達障害の医学的概念を説明することができる。 2 各発達障害に対する医療的支援を述べるすることができる。 3 医療と教育の円滑な連携方法を説明することができる。
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	受講生に複数の教科書を提示して、受講者に教科書を決めさせた上で、教員も含めて、分担して発表を担当することを確認した。
講義の工夫点	形態：受講生4人(現職2,教員経験者1,学部新卒1)。対面授業。 工夫点：受講者が選んだ教科書を分担して、担当部分の内容紹介及び疑問を感じた部分・理解が難しかった部分を口頭で説明するのみとし、受講者の負担軽減のために、配付資料の作成は必須としなかった。医療そのものではなく、医療と教育の基盤にある神経科学的知見を取り上げることで医療と教育の円滑な連携を受講生と考えることにした。
プチ・リフレクション	院生の様子：発表分担部分は熱心に取り組んだが、担当回以外の予習は十分とは言えず、自発的に質問を行うのは主に現職教員学生1人のみであった。 準備した資料：教科書内容を補充する資料を担当教員が毎回準備した。 学習活動：大学院科目として、新規知識を得ることや学校教育での自他の取り組みについて多様な視点を持つことの重要性の理解を促す目的で、現在の医療や教育の基盤である神経科学的知見から教育の現状と課題をとりあげた教科書を用いたが、全体を通して内容理解に困難さがみられ、受講生が疑問点をあげるが少ない状態で、当該教科書を用いた狙いとの乖離が大きかった。
次年度の改善点	本年度も受講生が使用教科書を複数提示の中から選定したが、提示から選定までの期間を本年度の2か月間よりも長くとることによって、受講生がより関心の強い内容の教科書を選定できるようにする。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	特になし。

講義名	心身障害科学
担当者名	橋口 知
講義の目標	現職：これまでの特別支援教育実践を振り返り、より適切な支援を挙げることができる。 ストマス：各障害の基本的知識を整理し、具体的な教育的支援を挙げることができる。 共通： 1 心身の障害について、教育及び保健福祉医療における概念を説明することができる。 2 各障害のからだところの構造や機能の特徴を述べるることができる。 3 各障害に対する支援を具体的に挙げることができる。
年	2025 (R7)
講義準備や打ち合わせのメモ	受講生と使用教材を事前検討し、教科書は指定せず、教員が指定したテーマを分担して各受講生が発表する形式で行うことにした。
講義の工夫点	形態：受講生4人(現職2,教員経験者1,学部新卒1)。対面授業。 工夫点：受講生が背景の異なる4人であったことから、特別支援教育で遭遇する障害種をもとに10のテーマを指定し、各自が2~3テーマを担当した。経験等を踏まえた資料は事前配付し、当日は発表及び教員による補充資料をもとに全体討議を行った。
プチ・リフレクション	院生の様子：発表担当者は、各自作成した資料を指定期日までにmanabaに掲載し、他の受講者は予習をして臨み、授業当日は、発表テーマに関する意見交換を行っていた。 準備した資料：担当テーマに関する資料 学習活動：担当者によっては動画等の使用によって発表時間が延長し、全体討議の時間が十分に確保できなかったり、受け身的な受講態度で自発的には討議に参加しなかったりするなど取り組む姿勢に差が大きかった。
次年度の改善点	受講生が分担して授業で提示する教材や資料について、事前指導を行
教育課程 (履修案内等への変更事項)	特になし。

6 教育相談 Day

教育相談 Day とは、各院生と複数の教員による面談の場を設定し、学生生活や学習状況について話し合うことによって、学生の学びを深めるとともに、教職大学院の教育改善に役立てる取組である。学生一人につき 30 分間程度、教員 2～3 名で行う形式を基本とし、次の日程で実施した。

第 1 回：令和 8 年 6 月（1 年生 14 名）

第 2 回：令和 8 年 12 月（1 年生 13 名）

面談記録をもとに、話題にのぼった事柄を分類した上で集計したものが、下表である。各学生の学習上の関心内容や困りごとについて語り合うだけでなく、要望事項や学びの手応え等についても聴き取った。

12 月の教育相談では前期の学生の GPA を基に、特に成績の振るわなかった学生に対して丁寧な聴き取りを行った。また、授業や実習を通して得られた新たな学びや視野の広がりを実感している学生が増え、2 年目の探究活動に対する意欲的な声が多く聞かれた。

教育相談 Day 院生からの質問・要望等

話題の分類項目		内容（一部）
学習面	授業について	レポート課題の取組状況、討議形式による充足感、視野の広がり、課題の量、履修登録時のガイダンス 授業資料の提示時期について
	実習について	各実習の運営や疑問点 院生の実習記録からの学び、M2 の実習先や進め方、実習校教員との連携の大切さ
	探究課題について	テーマ設定の難しさ、勤務校での探究継続の意欲と不安、方向性の明確化
	学習環境について	生涯学習研究棟にエレベーター、研究室のプリンター、遮光対策等の要望
	院生同士の協働について	院生同士の関係は良好、現職・ストマスの議論の進め方について
	全般的な学びについて	授業や実習による多様な考えの学び、論文精読や討議等による解釈力の体得、各実習による同僚性や特別支援教育の学び
その他	心身の状況について	自身や家族の体調・メンタル面の状況、睡眠状況、自身の性格、充実感
	生活の状況について	長距離通学、生活リズムの安定化、アルバイトの内容、通学方法 非常勤勤務の在り方
	勤務校との連携について	定期的な電話連絡や学校訪問、仕事と探究の両立の不安、探究テーマと校務分掌
	進路・今後について	教採の受験先・校種・教科、実習校での過ごし方 修了要件、進学の可能性

7 学部主担当教員アンケート

教職大学院で授業を行っている学部主担当教員から学生の状況を聞き取り,学生理解および指導に生かしている。

講義名	受講生の様子	工夫点	改善点	その他
理科指導法の省察	現職院生であり,積極的な姿勢で受講されていた。	資料などはOneDriveで共有していた。	講義資料の変更などが必要と思われる	
数学科指導法の省察	受講生の皆さんは,全員,熱心に授業に参加されるとともに,課題にも一生懸命取り組んでおられました。	受講生の課題意識や関心などをうかがいながら,できるだけそれらに沿った授業や話題提供等を心掛けました。	来年度以降も,受講者の要望等をできるだけふまえながら,授業改善に努めたいと思っております。	今後も,教職大学院の先生方と連携を取らせていただければ有り難く存じます。また,担当授業の改善についても引き続きご助言いただければと思います。
発達障害児の心理臨床	それぞれ課題意識を持って参加している様子であった。取り組みには個人差があった。	各々の関心や強みに沿った課題設定や役割分担など	特になし	
インクルーシブ教育における教師の専門性	特別支援教育コースの人だけだったので用語自体は既知であったものの,授業を進めるにつれ新たな知見を得たと同時に奥深さにも気付けた様子であった。	歴史的観点,国際的視点を混ぜ,講義として視点を示しつつ,ペア学習やグループ討議を入れ院生自らの答えを探せるように工夫した。	現職教員とストマスとで理解に差が出てしまい,ストマスの意見を拾い切れなかった。ペアの組み方を工夫することが今後必要である。	本講義は,通常学校の教員に特に聞いてほしい内容であるため,特別支援教育コースのための科目であると思わせない工夫が必要であると思った。そこでシラバスにはその旨を記載してみた。
発達障害サポートシステム開発	受講生にとってなじみのないトピックを扱ったことから,新たな知識を得られ,実践への意欲がわいた院生が複数いた。一方で,最後まで理解しきれない院生もいた。	発表や討議を通して理論と実践の乖離を埋めるよう心掛けた	さまざまな課題を取り上げて議論できたのはよかったが,最後時間が足りなくなり,まとめきれなかった。時間配分に気を付けなければならない。	

8 オープンクラス

(1) 目的

教職大学院だけでなく,教育学部教員にも参観を呼びかけ,授業改善に関してより多様な見地からの検討ができるようにする。

(2) 実施時期

通年

(3) 実施方法

- ・参観者は,教育学部院及び教職大学院教員
- ・原則として,期間中すべての教職大学院の授業科目を参観可能

9 修了生支援について

修了生が大学院修了後も継続して実践的な研究に取り組み、新たな学校づくりの一端を担える新任教員、及び地域や学校で指導的役割を果たし得る中核的教員として活躍できるよう、修了生等のサポートを実施している。

(1) 修了生アンケート調査

修了生の学校等の勤務状況を把握するために、修了後3年を経過した修了生にアンケート調査を実施している。今年度は、令和8年2月9日～2月24日を調査期間とし、第4期修了生(令和4年3月卒業)6名からの回答があった。

<回答者勤務先>

	小	中A	中B	中C	中D	中E																														
1 担当学年・学級	4・6年	3年	3年	3年	3年	2年																														
2 主な校務分掌	教務	生徒指導主任	ICT	研究主任	教科書	保健主任																														
3 在籍校での勤務年数	3年	6年	1年	1年	4年	3年																														
4 教職大学院のディプロマポリシーに関して			4:とても そう思う	3:少しそ う思う	2:あまりそ う思わない	1:まったく そう思わな い																														
ア 職務を的確に実践できる能力を高めることができた。			83.3%	16.7%	0.0%	0.0%																														
イ 諸課題に対して、学校の一員として対応できる能力を高められた。			50.0%	50.0%	0.0%	0.0%																														
ウ 自らの実践を理論に基づいて省察できる能力を高めることができた。			0.0%	50.0%	33.3%	16.7%																														
エ 授業改善やカリキュラム・マネジメントに対する能力を高められた。			66.7%	33.3%	0.0%	0.0%																														
オ 現場の課題を設定や解決のための方策を探究する能力を高められた			83.3%	0.0%	16.7%	0.0%																														
5 次の教育活動において、教職大学院での学びが生かされていると思うか。																																				
<table border="1"> <caption>Q5 教育活動での学びが生かされていると思うか</caption> <thead> <tr> <th>教育活動</th> <th>4: 当てはまる</th> <th>3: やや当てはまる</th> <th>2: あまり当てはまらない</th> <th>1: 当てはまらない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>学習指導</td> <td>5</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>生徒指導</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>保健安全指導</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>学級経営</td> <td>4</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>校務分掌業務</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table>							教育活動	4: 当てはまる	3: やや当てはまる	2: あまり当てはまらない	1: 当てはまらない	学習指導	5	1	0	0	生徒指導	3	3	0	0	保健安全指導	0	3	2	1	学級経営	4	2	0	0	校務分掌業務	5	0	1	0
教育活動	4: 当てはまる	3: やや当てはまる	2: あまり当てはまらない	1: 当てはまらない																																
学習指導	5	1	0	0																																
生徒指導	3	3	0	0																																
保健安全指導	0	3	2	1																																
学級経営	4	2	0	0																																
校務分掌業務	5	0	1	0																																
【具体例】日々の教育活動全般、総合的な学習の時間、職員との関わり、CBTを含めたICT活用、県単位の教科専門部会等																																				
6 教職大学院での研究成果をどのような形で還元しているか。具体例を記述。																																				
【記述例】勤務校での校内研修や授業研究、ICT活用の推進、研究指定校として根拠のある研究・授業実践																																				
7 チーム学校の一員として以下の項目についてどれくらい気を付けているか。																																				
【記述例】対話を大切にし、普段からいろいろな先生と話し、関係を築いている。																																				
ア 自身の担当業務を円滑に推進するために、管理職や他の職員との報告・連絡・相談を積極的に行っている。	4: 当てはまる	3: やや当てはまる	2: あまり当てはまらない	1: 当てはまらない																																
	83.3%	16.7%	0.0%	0.0%																																
イ 日頃から職員間のコミュニケーションを大切にして、同僚性をはぐくんでいる。	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%																																
ウ 校務分掌組織の機能化が図れるように連絡・調整に努めている。	66.7%	16.7%	16.7%	0.0%																																
エ 役割分担が明確でない業務に気づいたら積極的に引き受けるとともに改善案を提案している。	66.7%	0.0%	33.3%	0.0%																																
オ スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、巡回相談員等との連携推進に努めている。	33.3%	50.0%	16.7%	0.0%																																

8 教職大学院で学べてよかったと思うこと何か。具体例も記述。				
【記述例】省察という視点は、日々の業務で自分の支えとなっている。	4:当てはまる	3:やや当てはまる	2:あまり当てはまらない	1:当てはまらない
ア 教育課程の編成や実施に関して理解できたこと	33.3%	33.3%	16.7%	16.7%
イ 教科等の実践的な指導方法に関して理解できたこと	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%
ウ 生徒指導や教育相談に関して理解できたこと	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%
エ 学級経営や学校経営に関して理解できたこと	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%
オ 学校教育と教員のあり方に関して理解できたこと	83.3%	0.0%	0.0%	16.7%
カ 各種実習を通して鹿児島県の教育課題等について理解できたこと	16.7%	66.7%	16.7%	0.0%
キ 課題研究科目を通して研究方法、まとめ方、発表方法等について理解できたこと	66.7%	16.7%	16.7%	0.0%
ク 選択科目を通して組織経営分野に関して深く理解できたこと	16.7%	66.7%	16.7%	0.0%
ケ 選択科目を通して学校研究分野に関して深く理解できたこと	50.0%	16.7%	33.3%	0.0%
コ 選択科目を通して指導深化分野法に関して深く理解できたこと	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%
9 自らの実践を理論に基づいて省察することがあるか。具体的に記述。				
【記述例】学校全体を組織の視点で分析し、自分に何ができるのかを考えるようになった。				
10 日々の授業改善や教育課程編成等における成果や課題について記述。				
【記述例】学習者主体の授業実現に向けて、教えなければならない場面、委ねる場面のバランスを考えた授業づくりに取り組んでいる。				
11 教職大学院修了後も自身や学校の教育課題などを研究テーマとして探究しているか。				
【記述例】「児童が主体的に学ぶ授業づくり」について、毎年、教育論文や実践記録に応募し、自分なりに考えを整理しながらまとめている。				
12 教職大学院の修了生として、教職大学院に期待することは何か。具体的なものも記述。				
【記述例】移り変わる社会において、学び直しができる機会の提供や研修等への助言等	4:大いに期待する	3:まあ期待する	2:あまり期待しない	1:期待しない
ア 修了生個々のニーズに応じた相談や助言の機会の提供	50.0%	33.3%	16.7%	0.0%
イ 学校の教育課題改善のための校内研修等への助言	66.7%	16.7%	16.7%	0.0%
ウ 修了生が相互交流できる場の提供	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%
エ 現職教員の資質向上に役立つ研修機会の提供	66.7%	16.7%	16.7%	0.0%

<まとめ>

- 4段階で答える質問事項については、「当てはまる」等に該当する「3」と「4」の回答が最も多く、「1」の回答は少なかった。
- ディプロマポリシーに関する質問では、自らの実践を理論に基づいて省察できる能力を高めることができていると一人回答。
- 教職大学院での学びの活用については、「保健安全指導」に関して3人が「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と回答している。
- 現職教員の資質向上のための研修機会を求める意見が多い。

(2) その他の支援

修了生の求めに応じて、訪問サポート、メールサポート、大学での面談、成果報告会での実践報告などを実施した。